令和元年度第１回「知事と一緒に生き活きトーク」の発言要旨

１　テーマ：「外遊びで子どもの育ちを支えよう」
２　日　時：令和元年６月７日（金）１４：２５～
３　場　所：備前市総合運動公園体育館会議室（備前市久々井７４７）
４　参加者：国、市町村の教育関係者、民間団体で親子を支援する方、保育所や森のようちえんスタッフ、研究者、子育て当事者等：８名
５　知事挨拶

保育や子育てにおいて安全や管理などを考えると、建物の中で保育しようとなってしまうが、そうなると何か大事なものを失ってしまっているのではないかとも思える。

昔は、外遊びの方が良かったからそうしていたのではなく、中で遊べる建物がなかったから、その辺の小川や山に入って遊んでいただけだが、意外とそれがよかったのではないかなど、外遊びの価値が見直されている。

本日は皆様が、外遊びに関してどのような取組をされているのか、どういう視点を持っているのかなど、忌憚なくお聞かせいただきたい。

６　発言要旨

【自己紹介、今までの取組など】

・東日本大震災があり安全な岡山への定住を決めた。そうした中、備前プレーパークに出会い、魅力を感じて、備前市久々井を移住先に選んだ。自分を皮切りに久々井には子育て世代の移住が増えた。久々井は小さな集落だが、移住者と地元の方が子育てを通じて交流して、活気がある集落になっている。
・園舎を持たない森のようちえんの活動をしている。限界集落のようなところで活動しているが、近所の方からは子どもの声が聞こえるようになったと喜ばれたり、４０年ぶりに地域の祭りが復活したり、地域の活性化にもつながっている。
・以前は心理カウンセラーをしており、多くの人から様々な悩みを聞いたが、自己肯定感が全ての問題の根源にあると感じた。自己肯定感を育てるためにどうすればよいかを勉強する中で、森のようちえんの取組にたどり着いた。
・「体験の風をおこそう運動」を推進している。その取組の中で「やってみたいが自立への第一歩」というものが一番好きな取組である。
・「やってみたい」を実践して成功する、あるいは失敗しても、自分なりに納得して前に進めることが子どもの成長につながると思っており、この取組を広げていきたい。
・プレーリーダーという子どもの外遊びを支える仕事をしている。外遊びの価値は数値化できず、遊びの捉え方は人により様々なので、その価値を社会に分かりやすく伝えるのは難しいが、その価値を広く伝えていきたい。
・子どもたちが豊かに育つ環境づくりを目指し、おかやまプレーパークを運営している。プレーパークは外遊び体験の場所というだけではなく、子どもが成長する中で、多様な人々と出会う場所として大きな意義があると思う。家庭、学校とは違う、子どもにとっての第三の居場所にもなっている。
・勝央町で冒険遊び場活動を行っている。発達障害のある子どもの保護者から、外

遊びの機会を作ってほしいとの要望を受け、取組を始めた。実際に外遊びの中で、子どもが成長していく姿を目の当たりにし、活動の意義を感じている。
・特別な場ではなく、子どもが日常を安心して過ごせる場所として、保育園、学童保育を作りたいと思っている。
・子どもたちに「あぶない。」「やっちゃいけない。」と言わなくてよい環境での保育を目指し、地域や保護者の協力を得て、現在の保育園を作った。広い空間、安心できる場所、仲間、時間の余裕などがあり、かつ、優しく見守ってくれる大人がいれば、子どもは健やかに育つと思う。
・子どもの育ちや子育て支援を研究している。例えば、自己肯定感や社会性が、外遊びを実践する中でどれだけ培われたかを示すことは難しいが、エビデンスに基づき外遊びの価値を伝えることが研究者としての自分の使命だと思う。

【外遊びの効果、そのエビデンスなど】
・自分の周囲では、プレーパークで外遊びをしている子どもの多くは学力が高い。例えば、学校の先生から時計を読めない子が多いと聞いたが、プレーパークで遊んでいる子どもは時計が読める。外遊びの中で空間認知能力などが培われ、時計の円を理解することに役立っているようだ。遊びを通じて学びが育まれており、外遊びと学力向上には関連性があるのではないかと感じている。
・森のようちえんの卒園児には発達障害児が多いが、就学後の学校での様子は落ち着いていると聞く。存分に外遊びをした子どもたちは、刺激の多い環境の中で育っており好奇心も旺盛になる。好奇心が長所を伸ばすことに役立っていると思う。
・国の実施した調査によると、外遊びや自然体験が多かった大人ほど、人間関係能力が高い傾向にあることが分かる。実際、外遊びを一人でする子どもはなく、友達と一緒に遊ぶことで、コミュニケーション能力が育まれていると思う。
・勝央町が町有林を使って子どもの外遊びを始めた際、子どもはその場所を見て第一声で「何もない。」と言った。しかし、勝央町の人達が粘り強くそうした取組を継続していくと、子どもたちはその環境の中で自発的に遊ぶようになった。大人がきっかけを作り、見守っていくと子どもは確実に変わっていく。
・外は家の中とは違い、遊びの許容量が大きい。例えば、家の中ではバケツで水をひっくり返すことはできないが、外では可能だ。そうすると、水が土にしみ込んだり、流れていく様子を見ることができる。また、外では異年齢の子どもや、他の保護者など、様々な人と出会える。さらに、大人はマイナスに思うこと、例えば、雨の中の遊びなども子どもにとっては魅力的である。
・外遊びには様々な利点がある。子どもが自分で考え、工夫して遊べるようになる。また、子どもにべったりくっついていた保護者も、他の保護者の見守りの様子から、見守り方を自然と学び、少し距離を置き、子どもが自由に遊ぶのを見守れるようになる。子どもだけではなく、大人も成長できる。
・平成２５年度から外遊びの普及啓発を行ってきた。将来的には、行政の関与がなくても、保護者自ら活動できるような環境を作ることを目指していた。５年間の取組の中でそろそろ大丈夫と思い、昨年度、ボランティアグループに企画運営の委託をしてみたところ、遊びに来る人が激減してしまった。イベント化すれば人

は来るが、場は提供するからいつでも遊びに来てくださいという形にすると、行く勇気がないのではないかと思う。５年間取り組んできたが、そうした課題も見えた。

・保育園の園長という立場上、イベントよりも子どもの日常を充実させたいと考えている。自然は豊かで変化に富んでおり、外でいろんな動物や昆虫、植物と触れ合う環境は、好奇心を育む。自分はそうした保育園を作るために多くの苦労をしたが、行政には、是非、そうした環境整備の支援や、多くの人がそうした体験ができるまちづくりをお願いしたい。

・外遊びと子どもの社会性との関連性に関する調査を行ったが、外遊びを好む子どもほど自主性や共感性の得点が高かった。また、学童保育に通っている子どもは社会性が高いことが分かった。今は外で異年齢の集団の中で遊ぶ機会が保証されていない中、学童保育がその肩代わりをしているのではないかと感じている。

【今後取り組みたいこと、行政に望むことなど】

・保護者が選んで連れて行く体験は、それができる子とそうでない子に格差が生じる。就労率が高くなる中、それができない保護者も多い。そのため、外遊びの特別な場所を作るのではなく、日常の場所で遊びの質を向上していく必要がある。そこで、有効な外遊びの取組をいくつかモデルを作って、いろんな所で取り組めるよう広めていく事業に、行政が支援すればよいと思う。

・森のようちえんは特殊なものではないと考えている。その活動を是非多くの皆さんに広めたい。森のようちえんを知ってもらう備前県民局との協働事業を企画しており、こうした機会を通じ広めていきたい。

・保育園では野外に出るにも、移動手段がなかったり、子どもの安全のための人員配置ができなかったりする。バスの確保や、安全に園外保育するための人員配置などで行政の支援をお願いしたい。

・知事に「外遊びのまち　岡山県宣言」をしてもらい、その応援隊長になってもらいたい。

・モデル事業という点では、ドイツがモバイルプレイという移動型の取組をしていて、まちに出掛けていきそこで遊びを提供する仕組みを作っている。保育園から出かけるというやり方もあるが、そうしたモデルも検討してみてはどうか。

【知事まとめ】

・「かわいい子には旅をさせよ。」というが、そうしないと子どもがしっかり育たないという親の覚悟であったり、コミュニティの同意が取れたりすれば、随分違ってくると思う。

・みなさんがそれぞれの取組の中で、子どもたちが元気に育っていくのを体感されていることは、取組を進める上で、大きな推進力になると思う。

・我々も、前向きな自治体と協力しながらモデルを作っていくなどして、少しずつ外遊びに触れるきっかけを作っていくこと、又は、既に行政全体で取り組まれているところと連絡を密にすることが大事なのではないかと思う。